

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 16 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530656

研究課題名(和文) ジェンダー論からみるソーシャル・キャピタル概念の理論的・実証的検討

研究課題名(英文) Theoretical and empirical examination of the social capital concept from gender studies

研究代表者

杉原 名穂子 (SUGIHARA, Nahoko)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：00251687

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)： 現在、ソーシャル・キャピタル醸成の政策が各分野で注目されている。しかし、女性の場
合、地域や家庭での活動を従来多くになっており、人の絆の強調が女性の負担や不平等を再生産することが危惧される
。本研究では実証的な調査票調査を行い、ジェンダーとソーシャル・キャピタルの関係について、特にケア活動と家の
問題という新たな質問項目をいれて検討をおこなった。その結果、ソーシャル・キャピタルは市民性や寛容性の涵養に
は確かに貢献するが、ジェンダーや家の問題解消には関係していないことが明らかになった。性別分業に沿った形では
なく、それとは異なる活動やネットワークを育成・援助することが必要だといえる。

研究成果の概要(英文)： Currently, the policy of social capital building has attracted attention in vario
us fields. However, in the case of women, it has become more conventional activities in the home and commu
nity, that the emphasis of the bonds of people to reproduce inequality and burden of women is feared. In t
his study, it conducted the empirical survey, put new questions on the issue of house and care activities
in particular, that the relationship of social capital and gender was subjected to examination.
As a result, it finds that social capital contributes certainly to cultivate tolerance and citizenship bu
t it is not relevant to the issue of the house and gender. It can be said that we need the policy to devel
op and aid the network and various activities which are not in line with gender division of labor.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ソーシャル・キャピタル ジェンダー 一般的信頼

1. 研究開始当初の背景

ソーシャル・キャピタルという概念への注目は各分野で著しく、日本においても健康・教育・地域づくり・介護・子育てなど多くの問題に関連して調査研究が行われている。社会学においては従来、人間関係やネットワークがもたらす効果は、重要な分析テーマの一つであり特に目新しいものではない。にもかかわらず、21世紀にはいり、特にこの概念が脚光をあびているのには、個人化がすすみ、地域コミュニティや家族の力が弱体化している中で、地域の絆や人と人をつなぐ絆があらためて重要視されるようになったからである。

しかし、これらの調査研究では、ソーシャル・キャピタルのもつ効果や機能に光が当たる反面、それがもたらす問題点についてはそれほど多くはとりあげられていない。特に、ジェンダーの観点からはソーシャル・キャピタルを論じる場合に注意が必要である。女性の抱える問題の一つに、主体として自己を発信するよりも、他人との関係の中に位置づけられ、他人を配慮しケア役割を担う存在とされてきたことがある。地域や家族のソーシャル・キャピタル創出に、女性はこれまでも大きく貢献してきた。しかし、それは伝統的に女性の役割とされてきた活動と密接に関係しており、この状況下でソーシャル・キャピタルを強調し、その醸成のための政策を推進することは、女性にさらに大きな負担を課すことにもつながりかねない。

したがって、ソーシャル・キャピタルを個人化社会の対応策として有益に用いていくには、ジェンダー論の視点をいれた概念や図式の検討が必要である。

2. 研究の目的

女性は自律した個人であるだけでなく、他者をケアする役割をになうことが多く、コミュニティや職場に関わる場合、従来、家族という壁が女性の前に立ちはだかつてきた。男

性の場合、個人と近隣・職場の関係を問うモデルで十分に考察が可能であり、従来のソーシャル・キャピタル研究は、近隣や職場のネットワークをたずねる調査を行ってきた。しかし、女性の問題をとらえるには、個人とコミュニティ、というだけでなく、個人、家族、コミュニティ、といったモデルによる調査が必要である。よって、そのための項目をいれた調査を実施し、ソーシャル・キャピタルを構成する諸要素とジェンダー要因がどのように関係しているか分析することを研究の目的とする。特に、以下の課題について検討する。

- (1) ネットワーク、信頼、規範等、ソーシャル・キャピタルの構成要素について、ジェンダー要因はどのように関係しているか。特に、家族内でのケア活動との関係はいかなるものか。
- (2) 女性のソーシャル・キャピタルは、ボンディング型・ブリッジ型という概念にどのように関係しているか。
- (3) ソーシャル・キャピタルの創出・受益プロセスにおける問題点や利点、今後の課題は何か

3. 研究の方法

(1) 調査の概要

本研究では、以下の調査を行い、そのデータを分析しジェンダーとソーシャル・キャピタルについて検討する。

調査は2012年3月～6月、新潟県新潟市において調査票を郵送で配布・回収する形式で行った。新潟市は2005年に大合併を行い、2007年に政令指定都市になった。人口は約80万人。大都市の衛星都市というよりは独立した地方の一都市であること、また合併を経たことにより、伝統的な住民が多く住む地区、開発による新規来住者が多い地区、農村や漁村など、さまざまな地区をもつことから、社会関係資本のあり方を問うに適してい

る都市といえる。新潟市在住の 20-89 歳の男女（2012 年 1 月 1 日現在）652,000 人を母集団とし、住民基本台帳より系統抽出法により抽出した 3,070 人を調査対象とした。有効回収率は 1,315（回収率 42.8%）である。

(2) ソーシャル・キャピタル概念の操作的定義

「社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である」(R. パットナム)。パットナムは、この 3 つを社会関係資本（以下 SC）の要素と定義し、その後の日本での調査に大きな影響を与えた。内閣府がおこなった調査でもその定義は踏襲され、つきあい・交流、信頼、社会参加（互酬性の規範）の 3 つの指数を作成した。

パットナムはまた、ボンディング型（結合型）、ブリッジング型（橋渡し型）という類型化をおこなったが、その他、SC をはかるこれまでの調査では、規範的な要素（認知的 SC）とつきあいやネットワークを問う構造的な要素（構造的 SC）という二つの類型に注目したものも多い。

これらをふまえ、今回の調査でも、認知型と構造型の二つの SC 指標を作成した。認知型 SC として一般的信頼と特定化信頼を問う項目を、構造型 SC として日頃親しくしている友人の数と活動の頻度を問う質問を設定した（表 1）。特定化信頼は「あなたは日常生活の問題や心配ごとについて、相談したり頼ったりする人や組織がありますか？」という質問に 4 段階で、活動については「現在、次のような活動をされていますか？」という質問に「毎日～週数回」から「活動していない」まで同じく 4 段階で回答してもらった。友人数については、「日頃親しくしている友人は何人くらいいますか？」という質問に実数を記入してもらった。

表 1 社会関係資本の指標

（標準化したのち、単純平均値を算出）

認知型	一般的信頼 特定化信頼 区役所 学校・病院等の公的施設 ボランティアや NPO の組織 自治会等の地縁組織 家族 親族 近所の人 職場や仕事関係の人 それ以外の友人・知人
構造型	友人 親戚の人 近所の人 職場や仕事関係の人 子どもの学校関係の人 育児や介護関係の人 学校時代からの友人 娯楽や趣味の友人 活動 地縁的な活動 スポーツ・趣味・娯楽活動 ボランティア・NPO・市民活動 PTA 活動

4 . 研究成果

(1) 性別による差異

ソーシャル・キャピタルを構成する項目で、男女による違いがあるか単純にクロス分析を行ったところ、認知型 SC と構造型 SC では異なる傾向がみられた。

認知型 SC である信頼感については、親戚と友人以外、ほとんどの項目で男女差が認められない。他方、構造型 SC については、多くの項目で男女の違いがみられる。地域活動や親戚関係は男性が、PTA や介護関係は女性が活潑なネットワークをもっている。社会のジェンダー編成が日頃のつきあいや活動にあらわれており、男性が地縁・血縁的なものを、女性がよりインフォーマルでケア的なものを保持するという特徴は従来の SC 研究で

も指摘されているが、その傾向はこの研究でも確認できる。認知型では構造型ほど差があらわれないというのは興味深い結果である。

(2) 構成諸要素についての主成分分析

認知型 SC：特定化信頼

主成分分析結果から、組織 人への信頼という軸と、結合型 橋渡し型という軸が確認できた。従来、結合型、橋渡し型という SC 類型があげられてきたが、特定化信頼については、その類型を用いるのが妥当だといえる。なお、結合型の指標として、区役所、公的施設、地縁組織、近所の人、家族、親戚を、また橋渡し型の指標として、ボランティアや NPO の組織、職場や仕事関係の人、それ以外の友人・知人のスコアを選択することになる。

構造型 SC：活動と友人数

主成分分析結果から、結合型と橋渡し型以外に、個人的な SC とケア的な SC をたてた方がよいことがわかった。この 4 類型は男女でパターンに違いみられる。男性にとっては、結合型（親戚、近隣）と橋渡し型（職場、ボランティア）が対極に位置し、その中間に個人的 SC（趣味娯楽・学校時代からの友人）が位置する。そして、ケア型（育児介護関連、子どもの学校関連）は結合型でなくて、橋渡し型の方に近い SC となっている。

これに対し、女性はケア型は結合型に近く、橋渡し型は個人的 SC に近い。ケア活動がもつネットワークのもつ意味はジェンダーによって異なり、女性にとっては地縁・血縁的なつながりに近いものだとわかる。

各指標間の相関関係

認知型 SC は従来の結合型、橋渡し型の 2 類型で、他方で構造型 SC はあらたに個人型、ケア型を加えた 4 類型で、それぞれ指標を作成し、各指標間の相関関係とジェンダーの関連を調べた。

個人型と橋渡し型 SC については男女差はあらわれない。社会関係資本でもっとも男女

の違いが表面化するの、構造的 SC のうちのケア型と結合型である。

(3) 社会関係資本と市民意識・ジェンダー意識との関連

構造型 SC

社会関係資本は男性と女性それぞれの意識面にどのような影響を与えているのか。男女に違いがみられた構造的な SC に注目し、年代と最終学歴を制御変数として、意識を問う質問との偏相関係数を算出した。その結果、各 SC の指標と意識との関連が男女で大きく異なることが明らかになった。

男性にとっては結合型の地縁・血縁的なネットワークが重要な意味をもっている。特に、「社会問題に関心がある」「自分と意見の異なる人の話を聞く」といった市民性や寛容性に関する意識と正の関連がある。ただし、この寛容性はジェンダーや家の問題には及んでいない。個人型や橋渡し型 SC も、ジェンダーや家意識との関連を示さない。つまり、男性のジェンダー意識にはいかなる社会関係資本指標も相関がみられない。

女性の場合、もっとも市民性や寛容性意識との関連がみられるのは、学校時代からの友人や趣味を通じたネットワークといった個人型 SC である。また、ジェンダー平等意識と関連があるのは、職場（橋渡し型）のネットワークである。女性にとって伝統的な役割であるケア型 SC は、寛容性やジェンダー意識と関連しない。

以上から、地縁血縁ネットワークが強い男性と、ケアネットワークが強い女性という性別分業を維持したまま、社会活動やネットワークの強化をはかっても、男性のジェンダー問題意識や女性の市民意識醸成にはあまり効果がないことが推測できる。SC 量を増やすために地域や社会のつながりを密にしようという政策は、ジェンダーブラインドである場合、男女不平等の再生産につながるという

従来の研究で示された危惧は、ある程度妥当性をもった批判だといえる。

認知型 SC：信頼について

一般的信頼については、多くの国においてまだ研究が途についたばかりといえる。他者とのつながりが排他性や閉鎖性につながらないよう、一般的信頼の重要性が SC 論では主張されることが多い。この一般的信頼がどのように醸成されるか、教育との関係が示唆されることも多いが、まだ明確にはなっていない。

本研究の調査でも、認知型 SC は一般的信頼であれ特定化信頼であれ、市民意識や寛容性について高い相関関係を示し、重要な要因であることがわかる。ただし、この認知型 SC もジェンダー平等意識とはほとんど関係しない。唯一、男性の一般的信頼がジェンダー平等意識との関連を示しており、やはり、この一般的信頼をどのように醸成していくかが、ジェンダー問題の解決のために重要だということが本研究で示唆された。

(5)ジェンダーと社会関係資本

従来の結合型 橋渡し型の類型は男性により適合的で、家庭責任を抱えがちな女性の場合は、ケアが個人化か、ということが SC を検討する上では重要な視点であることが示された。単に、SC の量が多いか少ないか、というだけでなく、そのタイプや質を問題にすべきだとわかった。ジェンダー公正の視点からの政策をすすめるには、従来の性別役割とは異なるタイプの活動やネットワークを育成することが必要といえる。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

杉原 名穂子、認知的・構造的社會關係資本とジェンダー問題、人文科学研究、新潟大学人文学部、査読無、第 133 輯、21-41 頁、2013 年。

〔図書〕(計1件)

栗原 隆編、感情と表象の生まれるところ、ナカニシヤ出版、2013 年、127-143 頁。

6．研究組織

(1)研究代表者

杉原 名穂子 (NAHOKO SUGIHARA)、新潟大学・人文学部・准教授

研究者番号：002516